資料２

教員養成フラッグシップ大学５年目評価の実施結果について

① ５年目評価の概要

教員養成フラッグシップ大学（以下「大学」という。）については、指定から５年目にあたる令和８年度に５年目評価（最終評価）実施することとされており、今般、第１１回教員養成フラッグシップ大学推進委員会（令和８年１１月１２日開催）において、大学の５年間全体の取組状況について評価を行った。

② ５年目評価の実施結果

【大阪教育大学】【兵庫教育大学】

S 評価 : 指定期間５年間をとおして、毎年成果を積み上げながら確実に取組を進めていることが特筆できる。教員養成の在り方の変革等を牽引する役割を大いに果たせると期待できる。

【東京学芸大学】

A 評価 : 指定期間５年間をとおして、自律型カリキュラムデザインの独自着想を持った取り組みを毎年着実に進め、順調な進捗状況である。教員養成の在り方の変革等を牽引する役割を果たせると期待できる。

【福井大学】

B 評価 : 指定期間５年間をとおして、毎年段階的に取組を進めているものの、総合大学の教員養成の在り方として、当初の構想を全体的に達成したとは言い難い。委員会助言等を考慮し、教員養成の在り方の変革等を牽引する役割を果たせるよう一層の努力が必要である。

③ ５年目評価における４大学に係る総論

○　教員養成フラッグシップ大学に指定され５年を迎える。４大学それぞれにおいて、大学の状況や特長を生かして取り組むなかで、特例を活用した先導的科目・カリキュラムを５年間で着実に実装し、制度趣旨の先導的・革新的な教員養成プログラム教職科目の研究・開発からモデルの提示まで十分に達成されたと評価できる。

○　単なる科目提供や単位互換にとどまらず、連携 FD、コンソーシアムやアライアンス、コンサルテーション及び共同研究等にあげられるように、受入先大学の主体性を引き出しつつ連携の実質化を図る、多様な展開手法を創出した点が成果としてあげられる。

○　独自の自己評価尺度やルーブリックの開発、教育体験・実習との接続等、学生の成長実感や変容を多角的に捉える効果検証の枠組みが整いつつある。現状では、新課程の卒業生が輩出されていないため、引き続き全体の効果検証（教育実習先・勤務先となる学校・旧課程の比較等）を図られたい。

○　中央教育審議会における教職課程や教員免許制度の改革の検討動向との整合性を確保しながら、教職課程において共通で学ぶべき内容と、各学生の強み専門性として体系的に位置付ける学修内容について整理し、その具体的な在り方を示すことや、改革後の教職課程における新たな学習事項に係るコアカリキュラムの検討等において教員養成フラッグシップ大学としての知見を提供することが期待される。

○　今後は、教員養成フラッグシップ４大学協議会での連携・協働を一層強め、「教員養成フラッグシップ大学」総体として、日本の教員養成の在り方の変革等を牽引する役割を果たしていくことを期待したい。また、例えば指定大学から他大学への単位互換を用いた科目の提供や教員の派遣など、実務面において先導的科目・カリキュラムの普及を行うことも期待される。

④ 各大学の評価の趣旨

【大阪教育大学】

○　教員養成フラッグシップ大学として設定した明確な教師像のもと、ダイバーシティの観点に基づく多重・協働による省察型カリキュラムを基本理念とする５年間の取組を通して開発した、新たな授業科目の教育効果が確実に現れているとともに、その実施を担う学内外の組織も有効に機能していることが高く評価される。

○　ＤＰと整合する形で科目の開発・実施を行い、各教科の指導法等の単位数を減じる一方で、共通部分のオンデマンド化と対面での実践的指導を組み合わせるハイブリッド設計をおこなったほか、全学的なＦＤシステム（自己評価参加率90％超）を通じて大学教員の授業観転換と質の維持を試みた点が評価できる。

○　全国初となる教育課程特例の認定を受けて札幌大学へのオンデマンド科目提供を開始したほか、大阪工業大学、公立千歳科学技術大学とも特例認定を受ける等着実に波及させた点が特筆できる。

○　科目提供を先行的に実施してきたからこそ、横展開の可能性に関する知見の整理が望まれる。そのうえで、他大学でも活用可能な形への汎用化が望まれる。

○　今後は、教育実習後に予定される旧課程履修者との比較調査を通じた新課程の効果の確認とあわせて、他大学に向けた人的・財政的リソース不足等も踏まえた教員養成の維持・持続可能性のための支援に加え、教員養成の在り方の変革そのものを展開する枠組みの明確化を期待したい。

【兵庫教育大学】

○　教員養成フラッグシップ大学として教員養成スタンダードを再構築し、先導的・革新的なカリキュラムの開発とそれにあわせた減じる科目の構造化、それらの学修効果の検証、横展開に向けた体制整備等、５年間の取組が確実に成果を上げていると評価できる。

○　「学び続ける教師」を核に、DP から教員養成スタンダード（19 の教職基盤）、TSS（Teachers’ Standard-based Score）による学修の可視化まで一貫させたカリキュラム再構成は完成度が高い。また、それと整合する形で先導的科目を開発・開講するだけでなく、同時に起きるカリキュラム・オーバーロード解消のため、初等教科教育法を 1 単位化した。加えて、独自の「初等教科授業デザイン（10 科目）」や「小学校授業づくり入門」を配置し、教科教育担当者と「学習観の転換について考えるコミュニティ（FD）」を形成して学びの質の向上と指導観転換を図っている。

○　５５機関が参画する兵教大教員養成フラッグシップ大学コンソーシアムを設立運営し、岩手大学・大分大学・鳴門教育大学等に対して「シラバス・教材等のパッケージ提供及び連携 FD」による自走支援型の普及モデルを「共同研究」というコンセプトも交えつつ確立したほか、他大学での試行実践と検証等を進めている点も特筆でき、多数の学術論文・書籍刊行等を通じた発信も極めて活発であることが評価できる。

○　旧課程で学んだ 2 年次生（2021 年度調査）と新課程で学んだ 2 年次生（2025 年度調査）へのアンケートの比較により、ICT・データサイエンス・STEAM・インクルーシブ教育等に関する意識の有意な向上が確認された。引き続き、教育実習や卒業後の力量への効果の検証、及び他大学が自走導入できる手引き・パッケージの完成に期待したい。

【東京学芸大学】

○　多角的な教職科目の開発･効果検証･展開を行い、目指す教師像及び教師の資質･能力を踏まえて教育創成科目を中心とした授業科目を組み合わせ、学生が自ら設定した教師像の実現に向けた学びとして、「自律型カリキュラムデザイン」を構築している点が評価できる。

○　２つの目指す教師像と５つの資質・能力を掲げ、特例５科目を含む「教育創成科目」の開発や「教職専門性基準」の策定、現職教員研修にもつなげるプラットフォーム「I Dig Edu」の構築と運用等、独自の枠組み構築に向けて段階的に取り組んできた点は成果が認められる。

○　多くの教育委員会と連携を結んでいる点は特筆できるが、他大学連携・普及展開の観点から、実質的な連携の進展は現時点では既存の協力校（玉川大学）への少数の科目提供等にとどまっており、今後さらなる展開を期待したい。

○　今後は、構想の核である「自律型カリキュラムデザイン」や「自己創造のための教育体験活動」について、効果の検証方法を丁寧に検討された上で、教育実習での検証や卒業生への調査の検証等に取り組むとともに、他大学展開に向けて作成が予定されているブックレット等、５年間のまとめとさらなる展開に向けた課題の整理に取り組んでいただきたい。

【福井大学】

○　学部・教職大学院ともに教育課程の再構築を計画に沿って進め、「足す・減らすではなく、つなぐ」を理念に掲げ、法定単位数へのミニマム化を達成しつつ、複数免許取得や省察を核とした学修を実装したほか、学部における異学年協働・地域連携によるリエゾン科目群や、教職大学院における「学校拠点・省察的実践コアサイクル」を構築した点は評価できる。

○　教育学部において授業を担当しない教員も巻き込む担当者会議や日常的なFD等を試みているところ、教員組織が一体となって理論と実践の往還をより一層深めようとしていると認められ、今後は他学部も含めた大学全体での体制構築を期待したい。

○　工学部への展開については緒に就いたばかりであり、その実効性や持続可能性等の多角的検証が必要である。今後は、他学部の人的・物的資源をどのように活用し強みとして生かしていくのか意識した上で、工学部との異分野協働による教員養成モデルを構築することにより、総合大学における教員養成の展開に向けた参考事例となることを期待したい。

○　今後予定されている、科目の横展開、新Webサイトによる情報発信及びこれまでの普及啓発に加えたコンサルティング機能の充実等に取り組んでいただきたい。教員養成の在り方自体の変革を牽引するためには、「つなぐ」を単なる方法にとどめず、理念・要件として整理する等、他大学が自走導入できる形で示すことが重要である。